

多言語社会キルギスにおけるモノリンガルと バイリンガルの「説得の戦略」

— キルギス語とロシア語の意見文のエートスと議論の型 —

西 條 結 人
(2024年10月9日受理)

Persuasion Strategies Among Monolingual and Bilingual Speakers
in the Multilingual Society of Kyrgyzstan

— Focusing on ethos and topos in written statements of opinion in Kyrgyz and Russian —

Yuto Saijo

Abstract: The purpose of this study is to elucidate the characteristics of persuasion strategies of speakers through written statements of opinion in multilingual society featuring multiple languages and cultural value systems. This study considered Kyrgyzstan as an example and gathered and analyzed 112 written opinion statements from four groups: (1) monolingual Kyrgyz speakers; (2) monolingual Russian speakers; (3) bilingual Kyrgyz and Russian speakers, Kyrgyz dominant; and (4) bilingual Kyrgyz and Russian speakers, Russian dominant. The study found that monolingual and bilingual Kyrgyz speakers exhibited weak autonomy as writers, with inessential “circumstance” topos as part of their ethos. However, Russian speakers, especially monolinguals, exhibited strong autonomy as writers, favoring essential “definition” and “similitude.” This suggests that persuasion strategies with differing characteristics are favored among monolingual and bilingual Kyrgyz and Russian speakers in the context of a multilingual society.

Key words: Persuasion strategies, ethos, topos, multilingual society, Kyrgyzstan

キーワード：説得の戦略，エートス，議論の型，多言語社会，キルギス

1. はじめに

「説得の戦略」は、レトリックの5部門「構想」「配置」「修辞」「記憶」「所作」の中で、説得の中身と方向性を決定する「構想」において、エートス、ロゴス、パトスの3つの基本概念によって決定される（徐・柳澤，2007）。エートスは書き手の性格を描くことによって説得する要素，ロゴスは論理的に説得する，または，論理的に説得したと感じさせる要素，パトスは読み手の感情を誘導し説得する要素であり（柳澤，2006），書字と口頭による説得における基盤となる。特に，文章における説得ではエートスが書き手の説得

効果を左右する重要な要素となる（柳澤，2006；リース，2014）。ロゴスには議論の型（トポス）と呼ばれる下位概念があり，人々が通常説得的であると考えている事柄，また説得的な効果を持つとされる方法を概観したものである（パーク，2009）。書き手は，エートスをどのような議論の型と関連させ，読み手を説得しようとするかが重要である。

また，「説得」の言語行為は，書字と口頭の両方で行われるが，書字での説得は，読み手が不在の中での言語行為であり，書き手は想定する読み手を頭の中で想像しながら，読み手の反応を考えなければならない（ルリヤ，2020）。そのため，書字による説得の言語行

為は書き手がいない場所でフェイス侵害行為 (Brown and Levinson, 1987) が起こる可能性も考えられる。

多言語社会では1つの社会の中で複数の言語や文化的価値観が共有されており、モノリンガルとバイリンガルの言語使用と社会文化には密接な関わりがある。特に、旧ソ連諸国では基幹民族言語とロシア語への価値観がソ連時代から変化しており、言語、民族、政治をめぐる社会的問題化する可能性がある (堀口, 2019)。1つの社会の中で様々な言語や文化を背景とする人々の間で、言語、民族、文化的価値観が異なれば、「説得の戦略」も異なる可能性がある。言語には固有の論理構造があり (Kaplan, 1966; 渡邊, 2023)、多言語社会において、どの言語を母語とするかによって好まれる論理構造が異なり、書き手と読み手の母語、文化的価値観の差異が文章の説得性に影響が及ぶことも考えられる。基幹民族言語、もしくはロシア語モノリンガルだけではなく、バイリンガルにも着目し、社会全体における「説得の戦略」を明らかにしておく必要がある。

本研究では、モノリンガルとバイリンガルが混在する多言語社会の例としてキルギス共和国 (以下、キルギス¹⁾) を取り上げる。キルギスは、社会文化を構成する民族が90以上という多言語多民族国家で (Orusbaev et al., 2008)、法的には国家語のキルギス語と、公用語のロシア語の二言語をリンガフランカとする二言語併用社会である。キルギスを研究対象とすることで、旧ソ連の多言語社会でのモノリンガルとバイリンガルの文章における実際の言語使用を「説得」という観点から1つの事例を示すことができる。

本研究は1つの多言語社会の中でキルギス語とロシア語の二言語を主な言語背景とするキルギスにおいて、モノリンガルとバイリンガルの文章における「説得の戦略」を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

2.1. キルギスにおける言語使用と教育に関する研究

キルギスの言語状況をめぐっては、2つ以上の言語コミュニティが社会的に接触する言語接触が日常的に起こり、多様な言語文化を背景とする人々が1つの社会の中で生活している。Natsional'nyi statisticheskii komitet Kyrgyzskoi Respubliki (2023) (以下、Natsstatkom, 2023²⁾) によれば、2022-2023年度のキルギス国内の初等中等教育機関の児童生徒145万9276人のうち、約86.6%に当たる126万4242人がキルギス語、ロシア語または二言語教授学校に在籍している。高等教育機関の教授言語別の学生数を見れば、

22万7582人のうち、7万9385人 (34.9%) がキルギス語、11万8864人 (52.2%) がロシア語で教育を受けている (Natsstatkom, 2023)。キルギス国内の人々の多くがキルギス語もしくはロシア語、または二言語での教育を受けている。また、教授言語別の初等中等段階の教育が言語使用と言語コミュニティに密接に関係しており、教授言語と居住地によって、習熟度と言語環境別に話者をキルギス語、ロシア語のモノリンガル、キルギス語・ロシア語バイリンガル (キルギス語優位) (ロシア語優位) に大別できる (Korth, 2005)。大学生の言語使用に関しては、出身教授言語学校によって、思考する場面、書く場面で言語選択と使用が異なる (西條, 2019) ことが報告されている。

これらの先行研究から、データ収集の際には回答者の言語使用に関して、初等中等教育段階の教授言語に留意すること、バイリンガルは2群に分け、書く場面において書き手にとってキルギス語とロシア語のどちらが優位な言語かを事前に確認しておく必要がある。

2.2. 「説得の戦略」及び「説得的アピール」研究

「説得の戦略」と「説得的アピール」は、古典修辞学のエートス、ロゴス、パトスに基づいた観点である。

「説得の戦略」研究は、エートス (柳澤, 1991; 西條, 2021)、ロゴス (柳澤, 1993; 香西, 1998)、エートス、ロゴス、パトスの3要素に着目した研究 (徐・柳澤, 2007) 等がある。議論の型の選択には書き手の思想や世界観が反映されること (香西, 1998)、各議論の型による書き手の性格の傾向はエートスでの表現効果の違いとして出現すること (柳澤, 1993) が確認されている。言語別に見れば、英語の説得力はエートスからパトスへの転換が重要であること (柳澤, 1991)、日本語はエートス、韓国語はパトスに集約されること (徐・柳澤, 2007)、キルギス語とロシア語ではエートスの使用傾向に差があることが指摘されている (西條, 2021)。

「説得的アピール」研究には Connor and Lauer (1985)、Kamimura and Oi (1998)、Thondhlana (2000)、近藤 (2013)、西條他 (2015) 等がある。英語話者は「言論」 (Kamimura and Oi, 1998)、シヨナ語話者「信頼性」、日本語話者「情動」 (Kamimura and Oi, 1998; Thondhlana, 2000; 近藤, 2013)、ウズベク語話者「道徳」 (近藤, 2013)、スペイン語話者は「習慣」 (西條他, 2015) の使用率が高い傾向にあった。また、Thondhlana (2000) において、シヨナ語・英語バイリンガルの英語文章は、シヨナ語の修辞的影響を受けたことが明らかになっている。「説得的アピール」研究は全体の傾向を明らかにしたものであり、各アピー

ルが互いにどのように関わっているのかについての質的な分析には至っていない。モノリンガルだけではなく、バイリンガルの「説得の戦略」に着目し、それぞれのアピールが有している機能や、読み手への説得効果を質的に分析する必要がある。

先行研究における課題を踏まえ、本研究では次のような研究課題を設定した。

- 研究課題1：モノリンガルとバイリンガルが混在する社会における異なる言語話者は、意見文においてどのような「エートスと議論の型」を用いるか。
 研究課題2：意見文の「エートスと議論の型」において、キルギス語・ロシア語バイリンガルのそれぞれの言語的な優位性はどのように表出するか。

「エートス」単独での分析に関しては、西條 (2021) で既に述べたが、本稿では分析の観点に「議論の型」を追加し、「エートスと議論の型」として詳細に検討する。

3. 調査の方法と分析の枠組み

3.1. 調査の概要

本研究では、書き手の意見や主張を、根拠に基づいて論理的に述べ、読み手を説得する文章を意見文 (近藤, 1996) として扱う。課題内容は、伊集院・高橋 (2012) を参考に「インターネット社会において新聞や雑誌は必要か」というテーマとし、課題の読み手は書き手と同じ言語文化圏の者とした。意見文課題の使用言語はキルギス語、もしくはロシア語とし、分量はそれぞれキルギス語意見文150語以上、ロシア語意見文180語以上と設定した。データの訳出作業では、キルギス語、ロシア語を母語とし、JLPT N1相当の日本語が堪能な者2名とともに訳出した文章の正確さを確認した。

調査は、2019年1月から2月にピシケク市にある3つの大学で東洋学、言語学、国際関係論等を専攻する学生112名を対象に実施した。学生はキルギス語、またはロシア語教授学校出身で、使用言語は「日常生活の書く場面で最も使用頻度の高い言語」(Skutnabbkangas, 1984) とし、意見文を書いてもらった。

本研究で扱う意見文データは次の4群から成る。以下では、回答者の詳細について所属群、意見文での使用言語、収集数、出身言語教授学校の順に示している。

- (1) キルギス語モノリンガル【キルギス語意見文】(KK) 18編 [キルギス語教授学校18名]
- (2) ロシア語モノリンガル【ロシア語意見文】(RR)

29編 [キルギス語教授学校3名、ロシア語教授学校26名]

- (3) キルギス語・ロシア語バイリンガル (キルギス語優位)【キルギス語意見文】(KRK) 37編 [キルギス語教授学校36名、ロシア語教授学校1名]
- (4) キルギス語・ロシア語バイリンガル (ロシア語優位)【ロシア語意見文】(KRR) 28編 [キルギス語教授学校6名、ロシア語教授学校22名]

3.2. 分析の枠組み

本研究では、書き手がどのように読み手の信頼性を得ようとしているかを検証するため、まず「エートス」に着目し、Connor and Lauer (1985) を参考に KK, RR, KRK, KRR の4群のデータを質的に分析し、次の表1の通り4つのカテゴリーに分類した。

表1 エートスの種類と定義

エートス	定義
書き手の直接的体験	テーマに関する書き手の直接的経験、もしくは何らかの権威を示す情報を提供するもの
書き手の読み手への関心と視点に対する敬意	書き手の読み手への関心と視点に対する敬意を示すもの
書き手と読み手が共有する関心と視点	書き手と読み手が共有する関心と視点を示すもの
書き手の性格の良さ、もしくは判断力	書き手の性格の良さ、もしくは判断力を示すもの

次に、出現したエートスとロゴスとがどのように関連しているのかを明らかにするため、Weaver (1970)、柳澤 (2006) を参考に、「状況」「因果関係」「類似」「定義」による4つの議論の型を定義し、分析した (表2)。

表2 議論の型の種類と定義

議論の型	定義
定義	「AはBである」という定義を原理とする立論
類似	同じ条件下にあるものは同様に扱われるべきだという立論 (たとえによる立論も含む)
因果関係	因果関係を根拠とする立論
状況	「事態がこうなっているから、これ以外に選ぶ選択肢がない」という発想を原理とする立論

Weaver (1970) の議論の型は、主張する判断が同じであっても、議論の型の選択には、書き手の個性が反映される (香西, 1998)。また、書き手の主体性の強弱、状況への依存度、対象への本質の迫り方が異なる (柳澤, 2006)。例えば「定義」の議論の型は、書

き手の主観だけで決まり、主体性が4つの型の中で最も高く、「定義」と「状況」は対極に位置関係にある（柳澤，2006）。

Weaver (1970) の議論の型は、エートスを中心とした形で再解釈されるべきものであること（柳澤，1993）、エートスとロゴスが共に読み手の「共通認識」に訴えるものであること（リース，2014）から、「エートスと議論の型」に着目し、分析を進めることとした。

4. 結果と考察

分析の結果、本研究で出現した「エートスと議論の型」は次の表3の通りであった。

なお、本稿では、紙幅の都合上、4群の中で特徴的な「エートスと議論の型」を有する用例を取り上げることとする。また、4群においてどのようなエートスと議論の型が使用されるかどうかを考察するため、使用頻度に関しては考慮の対象としないこととする。

表3 4群で出現したエートスと議論の型

	エートス	議論の型
KK	書き手の直接的体験	状況
	書き手と読み手が共有する関心と視点	状況 類似
RR	書き手の直接的体験	類似
	書き手と読み手が共有する関心と視点	類似
	書き手の性格の良さ、判断力	定義
KRK	書き手の直接的体験	状況
	書き手の読み手への関心と視点に対する敬意	状況
	書き手と読み手が共有する関心と視点	状況
	書き手の性格の良さ、判断力	状況
KRR	書き手の直接的体験	状況
	書き手と読み手が共有する関心と視点	状況
		定義
	書き手の性格の良さ、判断力	状況

4.1. キルギス語モノリンガル

KKの「エートスと議論の型」に関しては、エートス「書き手の直接的体験」と議論の型〈状況〉、エートス「書き手と読み手が共有する関心と視点」と議論の型〈状況〉、エートス「書き手と読み手が共有する関心と視点」〈類似〉の組み合わせが見られた。

それぞれ例を示し、結果を報告する。文頭の数字は文章中での通しの文番号、例末尾の（ ）は書き手の所属群、回答者番号を表す。

1点目のエートス「書き手の直接的体験」と議論の型〈状況〉の組み合わせとしては、KK08のような例

が挙げられる。KK08は、以下の例のように、インターネット無しの生活は考えられないという現代社会の状況と、インターネット接続にかかる費用を説明している。

(1) ④ Биз азыр жашоону интернетсиз элестете албайбыз. ⑤ Мындайча айтканда “телефонумда бирдик постоянно болсун”. ⑥ Ойлонуп көрсөк азыр көптөгөн акчанын баары ушул жака кетет. ⑦ Бир үй-бүлөдө жок дегенде бир киши бирдик үчүн айына 500 сом кетирет. ⑧ Ошол акча га башка нерсе алса деле болот. ⑨ Бирок биз аны бирдик үчүн коротобуз. (KK08)

「我々は今インターネット無しの生活を想像することができない。言い換えれば、いつも電話を通じてインターネットに繋がったまゝいのである。よく考えてみれば、大きな金額がどこかに消えている。家族内で一人あたり少なくとも月500ソムかかる。そのお金があれば、他の何かを買うことができる。しかし、我々は携帯電話に使っている。」

KK08は、家族一人当たりの携帯電話料金等、書き手自身が実際に経験、もしくは経験したのから具体例を示す〈状況〉を用いた立論形式であり、書き手の主観をなるべく抑えて、議論を展開していることがわかる。

2点目のエートス「書き手と読み手が共有する関心と視点」と議論の型〈類似〉についてはKK02の例を取り上げる。KK02は、「インターネットの普及に伴い新聞や雑誌などが読まれなくなったとは思わない。」という主張の根拠とし、キルギス語の諺「5本の指は同じではない」を用いて習慣の多様性について述べている。

(2) ⑨ Ал эми интернеттин көбөйүшү, газета, журналдардын окулбай калышына себеп экенине кошулбайм. ⑩ Анткени, “беш кол тең эмес” дегендей кээ бир адамга тактап айтканда үйдө отурган адамдар газета, журналдардан жаңылыктарды окуганды жакшы көрүшөт, талап кылышат. (KK02)

「インターネットの普及が、新聞や雑誌などが読まれなくなった理由だとは思わない。なぜなら「5本の指は同じではない」と言われるように、特に毎日家で過ごす人々にとっては、ニュースを新聞や雑誌を読むのが好きかもしれない。」

このKK02は書き手と読み手間で共有されている視

点であると考えられるキルギス語の諺や格言をエートスとして用いている。つまり、キルギス社会の人々という範疇において、キルギス人であれば、それぞれの好みに合わせた生活様式が大切であるから、「インターネットの普及が新聞・雑誌が読まれなくなったとは思えない」という正義原則によって意見を展開し、読み手の説得を試みている。

KKの意見文では、「書き手の直接的経験」を用いたエートスには〈状況〉の議論の型が好まれて使われており、書き手の主観性をなるべく抑えようとしていることがわかる。一方で、「書き手が共有する関心と視点」のエートスでは〈類似〉の議論の型と組み合わせる文章も見られた。〈類似〉は書き手の主観によって類似点を発見するものであり（柳澤, 2006）、〈状況〉の議論の型とは性質が異なるものである。

4.2. ロシア語モノリンガル

RRでは、エートス「書き手の直接的体験」と議論の型〈類似〉、エートス「書き手と読み手が共有する関心と視点」と議論の型〈類似〉、エートス「書き手の性格の良さと判断力」と議論の型〈定義〉の組み合わせが見られた。

本論文では、キルギス語モノリンガルKKには出現しなかったエートス「書き手自身の直接的体験」と議論の型〈類似〉と、エートス「書き手の性格の良さ、判断力」と議論の型〈定義〉について述べる。

まず、エートス「書き手自身の直接的体験」と議論の型〈類似〉の例としてRR11を挙げる。

(3) ⑫ Теперь поговорим о плюсах газеты. ⑬ Хоть газеты и журналы имеют какой-то мере свой контент но все же там всё написано на разные темы. (中略) ⑭ Мне нравилось читать детские рассказы посмотреть рисунки. ⑮ Душе приятно на это смотреть. ⑯ Впрочем можно уйти далеко в прошлое, когда мне было 12-14 лет это было очень приятно читать газету, я почувствовала некую гордость за себя я хвастался перед родителями. (RR11)

「新聞の長所について考えてみよう。新聞と雑誌にはある決まったテーマについての内容が掲載されるが、専門のテーマに限らず様々な問題についても取り上げられている。(中略)私は子供向けの物語を読むことや、絵を見ることが好きだった。見ていてとても楽しかった。かなり昔のことになってしまったが、12歳から14歳のときには新聞を読むのが楽しく、それをとても誇りに思っており、両親に自慢したことを覚えている。」

RR11は書き手自身の直接的体験の例を〈類似〉の立論形式に組み込み、新聞や読書への好意的な意見を示し、新聞や雑誌も必要であるという立場を表明している。新聞に触れるという行為を誇りに思っていること、新聞を読むという行為を両親に自慢したという成功体験を譬えに出し、読み手を説得しようとしている。KKでは書き手自身の行為を振り返るということは見られなかった例であり、「書き手の直接的体験」のエートスにおいて〈類似〉による立論形式も出現していないことから、モノリンガル間で好まれるエートスと議論の型が異なる可能性がある。

次に、エートス「書き手の性格の良さ、判断力」と議論の型〈定義〉は、RR06のような例が挙げられる。

RR06は、読み手の立場を想定し、書き手から答えが提示されていることから書き手が読み手の考えを判断しつつ意見を展開している。

(4) ⑭ Ну что если вы умный опытный человек, знающий что вам нужно от жизни. ⑮ В таком случае вы сами способны фильтровать поток информации, отделяя полезное для вас от лишнего и вам уже не нужен никто для этого.

⑯ Я считаю что если вы сами способны фильтровать информацию-то интернет - для тебя. (RR06)

「もし、あなたが人生のために何が必要かを知っている、賢く、経験のある人であればどうだろう。もしそうであれば、あなたは自分自身で情報の流れから必要なものを選別でき、不要な情報と有益な情報を区別することができる、そしてこのためにあなたはもう誰も必要ではない。

私は、あなたが自分で情報を選別できれば、インターネットは君のものであるという意見である。」

RR06は「インターネットは君（読み手）のためのものである」という主張を示すために、書き手がインターネットは読み手自身のためのものであるという〈定義〉を立論形式に組み込んでいる。柳澤（2006）によると、〈定義〉の議論の型は他の議論の型と比較すると書き手の主体性が最も高く、状況への依存が低いという。RRでは出現した〈定義〉による説得が、KKの意見文においては出現していないことから、モノリンガル間でも好まれる立論形式が異なる可能性がある。これは書き手の主体性や説得に対する確信の強弱に関わり、読み手への説得効果に差異が生じると考えられる。

4.3. キルギス語・ロシア語バイリンガル（キルギス語優位）

KRK では、エートス「書き手の直接的体験」「書き手の読み手への関心と視点に対する敬意」「書き手と読み手が共有する関心と視点」「書き手の性格の良さ、判断力」の全てが出現したが、議論の型は〈状況〉であった。

ここでは、同じキルギス意見文の KK で見られなかったエートス「書き手の読み手への関心と視点に対する敬意」と議論の型〈状況〉、エートス「書き手の性格の良さ、判断力」と議論の型〈状況〉を詳細に見ていく。

1 点目の「書き手の読み手への関心と視点に対する敬意」と議論の型〈状況〉の特徴としては、KRK26の冒頭文で出現したキルギス語の挨拶表現 Саламатсыздарбы. (salamatsızdarbı) が挙げられる。以下に例を挙げる。

(5) ① Саламатсыздарбы! ② Биринчиден туура айтасыз. ③ Азыркы учурда интернет пайда болгондон баштап, гезит журналдарды колдонгондорубуз азайып баратат. ④ Байыркы 20 кылымда гезит, журналдарын колдонсо ата-энелерибиз. ⑤ Азыркы убакыт өткөн сайын гезит, журналдарына көп маани бурулбай калгандай. ⑥ Техника өнүккөн сайын жаңы техникалар, пайда болуп баштаган. (KRK26)

「こんにちは。まずは、あなたの言う通りだと思う。確かに、インターネットが出現してから現在では新聞や雑誌を読むことが減少した。20世紀初頭には両親が新聞や雑誌を使っていた。時が経つにつれ、あまり注目されなくなってきた。技術の発展に伴い、新しい技術が出現している。」

挨拶表現 саламатсыздарбы. (salamatsızdarbı) は、改まった場面での複数の相手に対する挨拶表現である。そのため、挨拶の対象と推測されるのは、不特定多数の読み手である。弁論作成のための弁論術は「発見」「配置」「表現法」の3つの操作から成り、「配置」の中で、序論は、第一に書き手が読み手から好意を得ようとする努力、第二にこれから採用する区分、これから従おうとするプランを読み手に告げることの2つの規範的な契機を含んでいる（バルト, 2005）。文章の冒頭にて読み手への挨拶を行い、読み手への関心と視点に対する敬意を示し、書き手がいかに信頼できる人物かを読み手に訴え、その後続く書き手の意見表明について、読み手の支持を得やすくする狙いがあると考えられる。

KRK26のエートスと議論の型を見ると、挨拶表現 саламатсыздарбы. (salamatsızdarbı) の後には、〈状況〉の議論の型が用いられており、書き手が読み手に関心と視点に対する敬意を示すとともに、書き手の主体性を排除することで、書き手の謙虚さと読み手への敬意を示そうとしている。一方で、説得に対する確信の弱さにより、挨拶表現と〈状況〉の議論の型が組み合わせられているとも考えられる。

2 点目のエートス「書き手の性格の良さ、判断力」と議論の型〈状況〉の例として、KRK27が挙げられる。

(6) ① Ар бир нерсенин оң жана терс жактары бар. ② Мен оюум боюнча, эки маселенин тең оң жактарын жана терс жактарын жазгым келди. ③ Интернеттин пайда болушу менен китеп журналдарга болгон зарылчылык жоголду деп айтууну туура көрбөйм. ④ Бул менин гана жеке оюм.

⑤ Мен өзү айылда төрөлүп, өскөм, мен мектепте окуп жүргөндө бизде интернетке байланыш аябай жай жана жетишсиз болчу. ⑥ Ошондуктан мен үчүн газета, журнал, китептерден маалымат алуу оңой болчу. (KRK27)

「物事にはそれぞれ良い面と悪い面がある。私は与えられた2つの問題をその良い面と悪い面から考えてみたい。インターネットの出現によって本や雑誌に関する必要性がなくなったとは思わない。これは私の個人的な意見である。

私は村で生まれ育ち、私が学校で学んでいる時は、インターネットへのアクセスが遅く、コンピューターの数も足りていなかった。そのため、私にとって新聞、雑誌、本から情報を探すことは便利であった。」

KRK27は冒頭で「これは私の個人的な意見である」と断るという書き手の読み手に対する謙虚さを示し、議論を展開している。そして書き手自身の出自を示すトピックを選択することで、読み手と同じキルギスで育った者で、その中でも地方出身であることを示し、その置かれた環境から意見を展開している。KRK27で見られたエートスには〈状況〉の議論の型が組み込まれている。書き手自身の出自を〈状況〉から示すことによって、書き手の主体性を文章から排除し、本質的な議論を避けていると言える。ここでのエートスが「書き手の性格の良さ、判断力」を示すエートスであることから、〈状況〉を用いることで、書き手の謙虚さを読み手にアピールし、説得効果を高めようとしていると考えられる。

4.4. キルギス語・ロシア語バイリンガル (ロシア語優位)

KRRによる意見文では、エートス「書き手の直接的体験」と議論の型〈状況〉、エートス「書き手と読み手が共有する関心と視点」と議論の型〈状況〉、エートス「書き手の性格の良さ、判断力」と議論の型〈定義〉〈状況〉の組み合わせが出現した。

まず、エートス「書き手の直接的体験」と議論の型〈状況〉としては、KRR05の例が挙げられる。

(7) ⑪ Но как я и писала, что есть и плюсы в газетах и журналах. ⑫ Информация сохраняется как и в голове так и где то у вас полке надолго, а еще они вызывают некую ностальгию, передают атмосферу того времени, когда вы шли каждое утро покупать свежую газету, чувствовать этот запах, звуки перелистывающего бумаги. ⑬ Помните журналы особенно детские? ⑭ Мои родители часто мне их покупали, потому что телевизор и журнал были главным развлечениями. (KRR05)

「先述した通り、新聞と雑誌にも長所がある。情報は頭の中でも、どこかの本棚でも長く保存され、そして昔の雰囲気伝えてくれる懐かしさを呼び起こす、それは毎朝最新の新聞を買いに行っていた時の特別な匂い、新聞に触れたときの感覚などに思い出させてくれる。(あなたは)特に、子供用雑誌を覚えているだろうか。あの頃の主な遊びはテレビと雑誌だったから、両親によく子供用雑誌を買ってもらっていた。」

KRR05は、新聞や雑誌にも長所があるという意見を展開するために〈状況〉の議論の型が用いられている。二人称代名詞を用い、読み手にも過去を想起させながら、書き手が明示されることを避け、〈状況〉から立論することで、書き手の意見を抑制している。

エートス「書き手と読み手が共有する関心と視点」と議論の型〈状況〉は、次のKRR19の例が見られた。

KRR19は、「序論」で書き手と読み手が所属する社会の状況を提示しているものの、第2段落の冒頭では、書き手の意見である「新聞や雑誌が必要である」という立場以外の読み手を否定する手法も確認された。

(8) ① Я не очень-то согласна с тем, что с появления интернета нет необходимости читать газеты и журналы. ② Да, я только могу сказать что с появлением интернета жизнь людей становится все проще и проще. ③ Да, возможно это хорошо,

можно никуда не ходить, имею в виду всё это уже установлено в интернете. ④ Можно заказать еду в интернете, сделать покупки, шоппинг можно тоже в интернете. (中略) ⑦ Даже работай в интернете.

⑧ Вы думаете это хорошо или даже лучше? ⑨ Нет! ⑩ Это и есть катастрофа всего мира! ⑪ Для меня это глобальное разрушение жизни! (KRR19)

「インターネットの登場により新聞と雑誌の必要性が無くなったという意見に同意しない。もちろん、インターネットの登場により人々の生活がますます楽になったと言える。もちろん、これは良いことかもしれない、どこかに行かなくてもいいかもしれない、すべてがインターネットにあるからだ。インターネットで食べ物を注文したり、買い物をしたり、ショッピングもすることができる。(中略)そして、インターネット上で仕事までできるようになった。

あなた方は、これは良いと考えるだろうか、それともより良いと考えるだろうか。いいえ！これこそ全世界の大惨事である。私にとって、これは人生が大きく崩壊したことを意味する。」

KRR19は、書き手は「新聞と雑誌の必要性」を強く主張している意見文である。2文目から第一段落が終わる7文目までインターネットの利便性について、〈状況〉の立論形式を用いて、読み手への問いかけを交えながら文章を展開している。ただし、第2段落の冒頭(8文目)の下線部において、二人称代名詞 вы (vy)を用いて、直接的に読み手に問いかけた後で、2文目に即座に否定し、他の意見を排除し、書き手の意見に引き込んでいる。このような文章の展開から、書き手と同じ意見の読み手には、他の意見の選択肢が無いことを強くアピールするため、共有する関心の強さや視点の一致から、強い説得効果が生まれると考えられる。しかし、読み手の立場が書き手と異なる立場である場合、書き手は、文⑨で書き手と異なる立場の意見を強く否定し、文⑩と文⑪で書き手の主張を展開していることから、読み手の書き手への信頼性や共感という点で困難さが生じると考えられる。議論の型〈状況〉で、一見すると状況に依存した文章のように見られるが、読み手にとっては書き手の自信が溢れた、いわゆる「上から目線」のような意見文になっていると考えられる。バルト(2005)で指摘されている「序論」は、慎重に、控えめに、節度を持って始めなければならないことから、読み手の説得が困難なものになると考えられる。

エートス「書き手の性格の良さ、判断力」と議論の型〈状況〉に関してはKRR20のような例が確認された。

(9) ① Всему свое время. ② Наши предки не пользовались интернетом, у них были газеты, журналы и телевидение с помощью которых они получали новости, известия, информацию. ③ Мы же в своё время пользуемся интернетом, получаем всю информацию только через интернет, редко берём в руки журнал газеты, а если покупаем газеты, то ради всяких анекдотов и сканвордов. ④ Ну это сугубо моё личное мнение. (KRR20)

「それぞれのものにはそれぞれ適切な時がある。私達の祖先はインターネットを使ったことがなかったが、その代わりにニュースや情報を得るために新聞や雑誌、テレビなどがあった。私達の時代では、私達はインターネットを使っている、全ての情報はインターネットのみから入手し、新聞や雑誌などから入手することは稀で、もし新聞や雑誌を購入しても、笑い話かクロスワードパズルのために購入する。これは私の個人的な意見である。」

KRR20は文章の冒頭から、過去から現在といった社会状況を〈状況〉の議論の型を用いて述べ、最後に個人的な意見であると断りを入れている。このことから、〈状況〉の立論形式から書き手の意見や主観を前面に出すことなく、非本質的な議論を展開するとともに、その締めくくりで書き手の立場と異なる立場の読み手への配慮が窺える。

5. キルギスの言語・教育政策と「説得の戦略」

本節では、本研究で得られた結果とキルギスの言語・教育政策の関連を検討する。

まず、キルギスの言語政策と教育政策について整理しておく。キルギスにおいて法的な位置づけを持つ言語は、キルギス語とロシア語であり、2021年版キルギス共和国憲法第13条に明記されている。関連する法律としては、キルギス語は、従来のキルギス共和国法「キルギス共和国の国家語について」から、2023年にキルギス共和国憲法「キルギス共和国の国家語について」（以下、国家語憲法）が制定された。ロシア語は、キルギス共和国法「キルギス共和国の公用語について」が運用されている。2004年以降はロシア語に加え、キルギス語も民族間交流言語の役割を担う（小田桐, 2015）等、キルギス語の社会的役割が拡大している。2023年の国家語憲法の制定もキルギス語の社会的役割と機能強化の一環であると考えられる。

キルギスにおける教育の原則は、キルギス共和国憲

法と、キルギス共和国法「教育について」で示されている。キルギス語拡大政策の中で、公用語のロシア語の位置づけが不安定であり、その扱いが流動的である（小田桐, 2015）。キルギスでは国家語と公用語をめぐる力関係が社会情勢によって変化し、それに伴い国家語、公用語教育の方向性も変化する。そのため、人々の言語意識や言語使用にも影響が生じることが推測される。

本研究における「エートスと議論の型」を観点とした分析結果では、キルギス語・ロシア語バイリンガル KRR, KRRR において〈状況〉の議論の型をエートスと組み合わせる事例が広く出現しており、キルギス語が優位に出現したとも考えられる。法的にだけでなく実際の言語使用において、特に、「構想」においては、ロシア語よりも、キルギス語の影響を受けたと考えられる。

また、意見文の中で、偉人に関する引用が見られたが、キルギス語話者ではキルギス文学作家チンギズ・アイトマトフ、ロシア語話者では帝政ロシアの思想家アレクサンドル・ゲルツェンが引用されていた。偉人に関する引用以外にも、キルギス語話者の意見文ではキルギス民族の伝統住居ボズウイや民族の歴史を語る文章も出現した。他の旧ソ連諸国と同様に、キルギスにおいても基幹民族言語とロシア語に対する価値観が異なり、日常で接する言語や集団の差異が説得に影響を及ぼしていると考えられる。一方で、レトリックの「配置」を分析した研究ではロシア語が優位に出現した（西條, 2022）。テーマや説得方法の核となる「構想」ではキルギス語が優位に、「構想」で決定された内容を実現する手段となる「配置」においてはロシア語が優位となる可能性が考えられ、言語的背景がキルギスの人々の間で複雑に交差していることも考えられる。

本研究の結果から、キルギス語とロシア語での共通認識が異なっている、もしくは二言語の共通認識が複雑に交差していることが考えられる。共通認識は、共有された知恵、部族全体の前提となり、それぞれの文化特有なもの、普遍的真理である（リース, 2014）。つまり、キルギス語話者とロシア語話者間の接触場面において、書き手が本来説得力の高い共通認識を用いて「説得の戦略」を組み立てたととしても、読み手が所属する言語コミュニティが異なることで、共通認識が異なり、その文章が持つ説得力に影響する可能性がある。議論の型に関しては「常識＝通念」に関連しているため、時代や文化と共に変化する（野内, 2002）。今後の教育・言語政策によって、各言語話者間で説得力が高い議論の型も変化するとも考えられ、今後も検証が必要である。

6. 本研究のまとめと今後の課題

6.1. 本研究のまとめ

本研究の目的は、キルギス語、ロシア語モノリンガルとバイリンガルによる文章における「説得の戦略」を明らかにすることであった。2.2節で示した研究課題に基づいて本研究の結果を述べる。

研究課題1：モノリンガルとバイリンガルが混在する社会における異なる言語話者は、意見文においてどのような「エートスと議論の型」を用いるか。

本研究では4群間で共通する「エートスと議論の型」に関しては確認できなかった。個々の要素に着目すれば、エートスでは「書き手の直接的体験」「書き手と読み手が共有する関心と視点」が確認された。議論の型に関しては、キルギス語話者は〈状況〉の議論の型とエートスを組み合わせて用い、非本質的な議論を好んでいた。一方、ロシア語話者、特にロシア語モノリンガル(RR)はエートスを支える議論の型として〈定義〉や〈類似〉といった本質的な議論の型を選択していた。

研究課題2：意見文の「エートスと議論の型」において、キルギス語・ロシア語バイリンガルのそれぞれの言語的な優位性はどのように表出するか。

キルギス語話者の「エートスと議論の型」としては、エートスの語要素と〈状況〉の議論の型を組み合わせる意見文が多く見られた。キルギス語話者間においては、ロシア語話者の〈定義〉のような「説得の戦略」は確認できなかった。バイリンガルKRKに関しては、全て〈状況〉の議論の型であった。KRKは37名中36名がキルギス語教授学校の出身であったことから、学校でのキルギス語教育の影響も考えられる。

ロシア語話者RRとKRRについては、キルギス語話者のように使用する「エートス」には違いが見られなかったが、「議論の型」についてはKRRの方がRRよりも書き手の主体性が弱く、問題の本質にはあまり踏み込まない「説得の戦略」を好む可能性がある。同じロシア語が第一言語であるとしても、本研究のバイリンガルKRRについては、キルギス語の「議論の型」の枠組みを用いて意見を展開した可能性も考えられる。

6.2. 日本語教育・異文化コミュニケーションへの示唆

本研究で得られた知見は日本語、外国語教育において、教師は学習者の「説得の戦略」に注目する必要があることを示唆している。一般的な日本国内の大学等での日本語教育のように、多様な言語文化的背景を持った学習者が1つの教室で授業を受ける場合は、

学習者の第一言語の「説得の戦略」が異なる可能性がある。

また、日本語の作文教育において評価者の価値観から外れた文章が低く評価されることがある(長谷川・堤, 2012)。教師は、書き手がどのように読み手を説得しようとしているかを留意するとともに、日本語の「説得の戦略」を紹介し、必要に応じて指導を行うことが重要である。それとともに、学習者の第一言語での「説得の戦略」にも注目することにより、学習者はより多角的な視点を持ち文章を書くことが可能になる。

グローバル化の進展に伴い、日本語を媒介語として、母語話者間、母語話者と学習者間だけでなく、学習者間での文章によるコミュニケーションの場面も増加することが考えられる。言語の論理構造(Kaplan, 1966; 渡邊, 2023)と同時に日本語学習者の第一言語における文章の「説得の戦略」を明らかにしておくことは重要である。多文化共生という観点からも、多言語社会において人々がどのようにすれば共生可能なのか、その可能性と課題を、実際の言語使用から示していくことが重要であろう。

6.3. 今後の課題

本研究では、意見文におけるキルギス語、ロシア語モノリンガルとバイリンガルの「説得の戦略」を、「エートスと議論の型」の観点から明らかにした。

今後の課題としては次の通りである。本研究での意見文課題では、言語の使用頻度に基づく回答者自身の判断としたが、バイリンガルのダブルリミテッド等も考えられることから、回答者の第一言語、第二言語能力を測定するテストを作成し、改めて調査を実施することも検討する必要がある。

また、本研究では書き手が用いる「説得の戦略」の特徴を明らかにすることに留まっている。読み手の視点で、モノリンガルやバイリンガルが書いた文章を、読み手がいかに理解し、書き手の意図通りに読み手の意識や態度の変容が起こるかについては検証できていない。「説得」という行為の性質からも、読み手が文章をどのように理解し、文章を読む前と読んだ後で、どのような意識や態度の変容が見られるのかという観点からも分析を進めることは重要である。これらの課題に取り組むことで、多言語社会におけるモノリンガルとバイリンガルの「説得の戦略」の特徴をより詳細に明らかにできると考えられる。

【注】

- 1) 「キルギス」の日本語表記は、中央アジア研究者の間では原語の発音に近い「クルグズ」や「クルグズスタン」と表記されることもあるが、本稿では外務省等が用いている表記に倣い、「キルギス」と表記する。
- 2) 本研究でのキリル文字表記は、小松他 (2005) の「翻訳・アルファベット表【クルグズ語】【ロシア語】」に倣い、表記する。本文中引用するデータについてはキリル文字で表記し、日本語訳を併記する。

【参考文献】

- 伊集院郁子, 高橋圭子 (2012). 「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文の構造的特徴 - 「主張」に注目して -」『日本語・日本学研究』2, 1-16.
- 小田桐奈美 (2015). 『ポスト・ソヴィエト時代の「国家語」 - 国家建設期のキルギス共和国における言語と社会 -』, 関西大学出版部.
- 香西秀信 (1998). 『修辭的思考 - 論理でとらえきれぬもの -』, 明治図書.
- 小松久男, 梅村坦, 宇山智彦, 帯谷知可, 堀川徹 (2005). 『中央ユーラシアを知る事典』, 平凡社.
- 近藤章 (1996). 「第3章 ジャナル別表現の技術5「意見文」の作文技術」国語教育研究所 (編) 『作文技術指導大事典』, 明治図書, 225-241.
- 近藤行人 (2013). 「説得のアピールを用いた日本語学習者の論証文の分析 - 日本人大学生, ウズベキスタン人大学生との比較 -」『第二言語としての日本語の習得研究』16, 160-177.
- 西條結人, 田中大輝, 小野由美子 (2015). 「意見文課題における説得のアピールの日西対照研究 - 日本とスペインの学生の作文比較 -」『教育実践学論集』16, 95-107.
- 西條結人 (2019). 「多民族・多言語社会における言語選択と使用に関する社会言語学的研究 - キルギスの大学生を対象とした調査の結果から -」『語文と教育』33, 1-13.
- 西條結人 (2021). 「同一社会文化を背景とするバイリンガルの説得のストラテジー - キルギス語とロシア語の意見文のトピックに着目して -」『広島大学大学院人間社会科学部研究科紀要・教育学研究』2, 454-463.
- 西條結人 (2022). 「同一社会文化を背景とするバイリンガルの文章構造の特徴 - キルギス語とロシア語における意見文の比較 -」『NIDABA』51, 1-21.
- 野内良三 (2002). 『レトリック入門 - 修辭と論証 -』, 世界思想社.
- バーク・ケネス (2009). 『動機の修辭学』森常治 (訳), 晶文社.
- 長谷川哲子, 堤良一 (2012). 「意見文の分かりやすさを決めるのは何か? - 大学教員による作文評価を通じて」『関西学院大学日本語教育センター紀要』創刊号, 7-18.
- バルト・ロラン (2005). 『新装版 旧修辭学便覧』沢崎浩平 (訳), みすず書房.
- 堀口大樹 (2019). 「インタビュー調査に基づいたバルト 3 国のロシア語系住民の言語状況の考察」『スラヴ文化研究』16, 1-21.
- 徐洪, 柳澤浩哉 (2007). 「日韓の新聞社説におけるレ

トリック - 説得戦略の違いを考える -」『表現研究』85, 12-21.

- 柳澤浩哉 (1991). 「政治演説の修辭学的考察 - ケネディー大統領就任演説におけるエトス -」『表現研究』53, 20-27.
- 柳澤浩哉 (1993). 「トポスによる説得的言論分析の試み - 近松におけるロゴスの意味 -」『日本研究』8, 21-39.
- 柳澤浩哉 (2006). 「第2章 言語使用と社会・文化 第6節 レトリックと言語行動」縫部義憲 (監修)・町博光 (編) 『講座・日本語教育学第2巻 言語行動と社会・文化』, スリーエーネットワーク, 146-159.
- リース・サム (2014). 『レトリックの話 話のレトリック - アリストテレス修辭学から大統領スピーチまで -』松下祥子 (訳), 論創社.
- ルリヤ・アレクサンドル (2020). 『新装版 言語と意識』天野清 (訳), 金子書房.
- 渡邊雅子 (2023). 『「論理的思考」の文化的基盤 - 4つの試行表現スタイル -』, 岩波書店.
- Brown, P. and Levinson, S. (1987). *Politeness: some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Connor, U. and Lauer, J. (1985). Understanding Persuasive Essay Writing: Linguistic/Rhetorical Approach. *Text*, 5(4), 309-326.
- Kamimura, T. and Oi, K. (1998). Argumentative Strategies in American and Japanese English. *World English*, 17(3), 307-323.
- Kaplan, Robert B. (1966). Cultural Thought Patterns in Intercultural Education. *Language Learning*, 16, 1-20.
- Korth Britta (2005). *Language Attitudes towards Kyrgyz and Russian; Discourse, Education and Policy in post-Soviet Kyrgyzstan*. PETER LANG.
- Natsional'nyi statisticheskii komitet Kyrgyzskoi Respubliki (2023). *Obrazovanie i nauka v Kyrgyzstane 2018-2022*, Natsional'nyi statisticheskii komitet Kyrgyzskoi Respubliki.
- Orusbaev Abdykadyr, Arto Mustajoki, Ekaterina Protassova (2008). Multilingualism, Russian Language and Education in Kyrgyzstan. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 11(3-4), 476-500.
- Skutnabb-Kangas, T. (1984). *Bilingualism or Not - The Education of Minorities*. Multilingual Matters.
- Thondhlana Juliet (2000). *Contrastive rhetoric in Shona and English argumentative essays*, University of Zimbabwe publications.
- Weaver, Richard M. (1970). *Language is Sermonic. In Johannesen, Richard S., Strickland Remard and Eubanks, Ralph T. (Ed.). Language is Sermonic: Richard M. Weaver on the Nature of Rhetoric*. Louisiana State University Press., 201-225.

【付記】

本稿は2024年3月に福岡女子大学で開催された第48回社会言語学会研究大会での口頭発表「同一社会文化を背景とするモノリンガルとバイリンガルの説得の戦略 - エトスと議論の型の観点から -」の内容に大幅に修正・加筆を行ったものである。